

第六講 エーリス戦争の原因と目的

—スパルタ帝国主義が直面していた問題—

スパルタ国内の政治状況

3名の指導者と党派

リュサンドロス：モタケス出身。スパルタ国内の有力者の支持、ペルシアやエーゲ海域の諸都市の有力者との個人的関係。アテナイの内戦ではハルモステスとして遠征。小キューロスの反乱支援に関係（?）。ティブロンのアジア派遣（*Xen. Hell.* 3. 1. 4-7）に関係（?）。後にアゲシラオスの即位に影響力を行使。

パウサニ阿斯王：アーギス家の王。リュサンドロスの帝国政策に不安を抱く（*Diod.* 14. 33. 6; *Plut. Lys.* 21）。アテナイ民主派と和解（*Xen. Hell.* 2. 4. 31, 35-36; *Plut. Lys.* 21）。後にテゲアに亡命。エーリス戦争に登場せず（cf. *Diod.* 14. 17. 6-12：ディオドロスではパウサニ阿斯王がエーリス遠征の指揮官）。

David (1986)：10 はパウサニ阿斯を前 403 年から前 395 年まで反帝国主義者で保守派の指導者であったと規定する。

アーギス王：エウリュポン家の王。対アテナイ戦を指揮（*Xen. Hell.* 1. 1. 33-35）。アテナイとの平和交渉に関与（*Xen. Hell.* 2. 2. 11-12）。マンティネイアの戦いの時の指揮官（*Thuc.* 5. 63-73）。ペロポネソス戦争中、エーリスによって神託を拒否されている（*Xen. Hell.* 3. 2. 23）。エーリス遠征軍の指揮官（*Xen. Hell.* 3. 2. 23-29）。エーリスのクセニ阿斯と私的に強い絆を持つ（*Paus.* 3. 8. 4: *idiai xenos*）。

Cartledge(1987)：249 はパウサニ阿斯王によるアテナイ内戦の決着に批判的。訴訟で有罪に持ち込めなかった。戦争で勝利することが必要だった、と主張。

Hamilton (1991)：89 はスパルタ内部の党派の妥協の産物だ

ったと「憶測」する。

エーリス戦争はアーギス王の指導の下で行われた。

スパルタが直面したもう一つの事情

エーリスは遅れて来たポリス

シュノイクスモスはペルシア戦争後の前 471 年

コイレ・エーリスの統合

ピサティス（オリュンピアを含む）への拡大

トリピュリア（レプレオンによる統合の動き）への拡大

エーリスもレプレオンもスパルタの同盟国

レプレオンに対するエーリスの宗主権の要求

トリピュリアにおけるレプレオンの宗主権の容認

従属性の証としての貢税

エーリスとアルカディア人の対立

ピサティス・トリピュリア人との近親性

エーリス内の党派対立

トラシュダイオスの民主派と寡頭派（クセニアス派）

の確執

クセニアスはアーギス王の賓客でスパルタのプロクセノス（Paus. 3. 8. 4）

トラシュダイオス暗殺失敗→クセニアスおよびその党派の亡命

Cartledge (1987): 251 は亡命者の帰国をエーリスが強要されたと「推測されねばならない」と強調する。

エーリス戦争の原因と目的

クセノフォンは怒り（*orgizomenoi*）が原因で、懲らしめること（*sophronisai*）が目的。

ペロポネソス戦争中の反スパルタ行動

リカース事件

戦勝祈願妨害

いずれもスパルタに脅威を及ぼすものではない

エーリスの港湾を確保しようという海上帝国建設と関連付ける見解もある

原因はレプレオンではないのか？というのもアーギスの遠征軍がエーリス領内に侵入するとレプレオンは離反しているし (Xen. *Hell.* 3. 2. 25)、エーリスへの要求事項の中にレプレオンやペリオイコイ諸都市の自治が含まれているからである (Paus. 3. 8. 3)。

直接の原因が史料からはよく分からない。

アテナイなどとの同盟にしろ、リカース事件にしろ、二十年も前の出来事だし、その時スパルタは平静にしていた。アーギスの犠牲奉納拒否は何時のことかは分からないが、ペロポネソス戦争が終わって五年は経っているのだから、それを戦争原因 (Casus Belli) とする訳にはいかない。ここから理由もなく、過去のエーリスの行動が気に入らないという不快感から一方的に戦争を始め、エーリスに多大な領土割譲を強要した、という印象を与えることとなる。

しかし、同時代人のクセノフォンはこの時、アジアにいて事情に精通していたわけではないだろうし、『ギリシア史』にこの部分の記述を行なったのはこの事件から何年もの後のことであり、記憶に頼っての回想に近いということを考えると、スパルタがエーリスに対して行動を起こさざるを得なかった原因が歴史の記述から脱落してしまっているのも不思議なことではない。

帝国を保持するスパルタがエーリスに対して「自由」をプロパガンダとして使い得たのは、エーリスがペロポネソス戦争後、「自由」を侵害する行動を取ったからだろうと推測できる。それは、ペロポネソス戦争の終了によってスパルタがレプレオンから守備隊を撤兵させ、その機会を利用してエーリスがレプレオンに対して何らかの行動を取ったからだろうと考えられる。

つまり、講和に際してスパルタがエーリスに突き付けた条件の中に原因が含まれていたということである。

Xen. Hell. 3. 2. 23:

「[23] これら全てのことで怒りに燃えていたので、監督官たちと民会によって彼らを懲らしめようと決定したのであった。エーリスに使節団を派遣して、ラケダイモン人の当局は彼らがペリオイコイの諸都市を自治都市として自由を与えることが正しいと考えていると、伝えたのであった。それらの諸都市は戦利品として獲得したので、そのようなことは行わないとエーリス人が返答したので、監督官団は軍を動員したのであった。それで遠征軍をアーギスは率いてアカイア人たちの領土を通りラリソス川に沿ってエーリスへと侵攻したのであった。」

エーリス戦争の評価

スパルタ帝国主義を如実に示すものという説

戦後処理のスタイルはリュサンドロスのそれとは異なる。

デカルキア体制は強要されていない。

民主政は堅持。

エーリスの有力者との間のヘタイレイア関係は確認されない。

アテナイの内戦で取られた方針を踏襲

民主派との交渉。

亡命者の帰国受け入れを要求せず (Cartledge は帰国を強要したという)。

同盟分担金を要求せず。

ペリオイコイ都市の自治回復。

艦隊の放棄。

要地周壁の解体。

オリュンピア主宰権の容認。

Xen. Hell. 3. 2. 30-31:

「[30] 夏になるとトラシュダイオスは (使者を) 派遣してペアとキュレネの周壁を撤去し、トリピュリアの諸都市、プリクサ、エピタリオン、レトリノイ、アンピドリオイ、マルガナ、さらにはアクロレイアや、アルカ

ディア人が（エーリス人に）対して権利を主張しているラシオンを自由にすることに同意した。しかしエーリス人はヘライアとマキストスの間にある都市エーペイオンを領有することを要求したのである。というのは昔、その都市の所有者たちから 30 タラントンの金を支払ってその地方全体を獲得したからであると言いつつた。[31] しかしラケダイモン人は暴力によるのと同じように強制的に弱者から購入して手に入れることは正しいことではないと考えており、それを放棄するよう説得したのである。しかしオリュンピアのゼウスの神域を管理することについては、古くはエーリス人に所属していなかったにもかかわらず、彼らを排除せず、返還を要求する者たちは田舎者であり管理する能力がないと考えていた。これらのことが受け入れられるとエーリス人とラケダイモン人の講和条約と同盟が成立した。このようにしてラケダイモン人とエーリス人の戦争は終わったのである。」

結論

修正された帝国主義

市民団の弱体化に対応→出来るだけ対外的コミットを避ける。

ネオダモデイス・ヒュポメイオネスの増加とその活用→

国外・遠隔地への派遣。

ギリシア世界におけるスパルタのヘゲモニーの堅持。

対ペルシア戦の継続。

有力者間のヘタイレイア関係育成とヘタイロス支援の欠如(クセニア関係は見られるし、エーリス人亡命者との協同は見られるが)。

寡頭政を強要せず。

エーリスの政情に合致した政策の展開。

ハルモステスや駐留軍を設置せず (Xen. *Hell.* 3. 2. 29 : 戦争中のエピタリオンを除いて)。

対立し合う諸勢力の温存 (アテナイの民主派とエレウシスの寡頭派のように)。

コイレー・エーリスはエーリスの領土。

ペリオイコイ諸都市は自立。
少なくともコリントス戦争勃発まではスパルタの外交スタイル
として継続。
アーギス王の病死
若いアゲシラオス王の即位。スパルタ国内より、対ペルシ
ア戦に関心。ギリシア人の解放をプロパガンダとして利用。
国内はパウサニアス王に委ねられる。
コリントス・テーバイの反発（アテナイ民主派を支援）。
アテナイはスパルタへの協力を堅持。

- P. Cartledge (1987): *Agesilaos and the Crisis of Sparta*, Baltimore.
- E. David (1986): *Sparta between Empire and Revolution (404-243 B.C.): Internal Problems and their Impact on contemporary Greek Consciousness*, Salem.
- C. Falkner (1996): "Sparta and the Elean War, ca 401/400 B. C.: Revenge or Imperialism?", *Phoenix* 50, pp.17-25.
- C. D. Hamilton (1991): *Agesilaus and the Failure of Spartan Hegemony*, Ithaca and London.
- Roy, J. (1997): "The Perioikoi of Elis", in *The Polis as an Urban Centre and as a Political Community*, ed. M. H. Hansen, Acts of the Copenhagen Polis Centre 4, Copenhagen, 1997. pp.282-320.
- Do (1998): "Thucydides 5. 49. 1- 50. 4: The Quarrel between Elis and Sparta in 420 B. C., and Elis' Exploitation Olympia", *Klio* 80, pp.360-68.
- Do (2002): "The Synoikism of Elis", in Nielsen, T. H.. *Even More Studies in the Ancient Greek Polis*. Stuttgart, pp. 249-264.
- Do (2004): "Elis", in *An Inventory of archaic and classical Poleis*, eds. M. H. Hansen and Th. H. Nielsen, Oxford, pp.489-504.
- 中井義明 (1978) : 「エーリス戦争とスパルタ」『文化史学』34、pp.23-34.